2015年（平成27年）2月25日

ほっかいどうNIE通信

Newspaper in Education

第74号

発行　北海道NIE推進協議会　〒060-8711　札幌市中央区大通西3丁目6　北海道新聞社内　☎011-210-5802　FAX 011-210-5826

研究大会と冬季研修会開催

道NIE研究会　実践　自然体目指して

教師らでつくる北海道NIE研究会（会長・豊島義明札幌市立陵北中校長）は、「第19回北海道NIE研究大会」を昨年11月14日（会場・立命館慶祥中学高校）、恒例の「冬季研修会」を1月6日（同・北海道新聞社本社）に開催し、参加者が新聞活用法などの研さんを積んだ。（関連記事は2面に）

テーマは「生きる力と子どもたちの未来をはぐくむNIE」。はじめに豊島会長が「私たちの研究推進の合言葉は『自然体で身の丈に合った実践』。これをベースにしながら新聞活用を通じ多面的なものの見方ができる子の育成に努めましょう」とあいさつした。

続いて柳沢伸司・立命館大産業社会学部教授が基調講演。「事実と評価を読み分けるだけなく、事実かどうか多様な情報を比較させることが大切」「新聞社は私企業だが言論報道機関（ジャーナリズム）であることを意識した上で対立する情報を子どもたちに提供し、ぜひ読み比べをさせてほしい」―と話した。

このほか新聞記事を通し、憲法と地方公共団体との関係を読み解くなどの講義をしている菊地達夫・北翔短大こども学科教授らが実践報告を行った。

北海道NIE研究大会であいさつする豊島会長（中央）

冬季研修会には札幌市のほか室蘭市、十勝管内豊頃町、後志管内喜茂別町の教諭ら約25人が参加した。

昨年夏、徳島県で開催された日本新聞協会主催のNIE全国大会に参加した同研究会の檜克博事務局長（札幌市立三角山小教諭）が「NIE実践を楽しみながら、各校種・各教科においてごく普通の教育の営みとして導入することが大切だと分かった」などと報告した。

この後、山本あさ子・岩見沢市立明成中教諭と、青島正樹・札幌月寒高校定時制教諭がそれぞれの立場を通じた実践活動を発表していた。

考案した言語活動の成果

妹背牛町立妹背牛小学校長　柳谷　直明

小学生のころ、新聞配達をしていた。朝早く、販売店から自転車の荷台へ山のような新聞を積み、出発する。チラシがたくさん入っている日は特に重かった。雪の中を配達していると、ありがとうと言ってくださる方がいた。昔から私は新聞に縁があった。

先日、これまで書いた論文を整理していると、第10回北海道NIE研究大会（2005年11月）での発表ものが出てきた。「わくわく、どきどき調査隊1～『市町村合併』って何～」というテーマだった。

その資料にNIE活動を始めたのは00年とあった。この年の11月に考えた言語活動が「グループ・ニュース・バトル」である。新聞記事のよさをグループ内で紹介し合う言語活動である。スピーチが上手にできるようになった小学6年生により積極的な発言をさせたかった。そこで、開発した言語活動である。この実践を北海道新聞へ紹介したのが切っ掛けのようだ。

05年の1学期、「市町村合併」の授業依頼を受けた。「市町村合併」は内容としては、小学1年生に妥当ではないだろう。しかし、調査や発表方法を経験させるには面白そうな話題だった。そこで、取り組ませていただいた。1年生72人が保護者、市役所の方、栗沢町（現・岩見沢市）の小学生、住民へとインタビューをした。そして、グループごとに新聞を作成する授業を6月に公開した。かわいい新聞がたくさん完成した。頼まれて断らないと、よい結果を招く。

思い返すと1993年には、ある出版社の壁新聞コンクールで入賞した経験もある。表現活動として、新聞は有効な言語活動である。学習内容を新聞にまとめるのを子供たちは喜ぶ。

現在は日本新聞協会のNIEアドバイザーとして活動させてもらっている。新聞を使った授業を公開したり参観したりした。どの教科でも、教材として新聞は使える。全国各地に新聞を使った授業づくりを行っている先生がいる。ぜひ道内でも多くの先生に新聞を使った授業の醍醐味を味わってもらいたい。

一方で、教員として自らの授業力を向上させるため、20年間くらい授業研究を続けている。

4月4日には、札幌エルプラザで「国語科『学習用語』セミナー～第4回札幌会場～」を開催する。そこで新聞を使った模擬授業も行う。子供たちの成長のため、そして、教員生活をより充実させるために積極的な新聞活用や授業研究を多くの教員へ薦めたい。

船木編集長ノウハウ伝授

高校新聞局顧問が研修会

「道新こども新聞　週刊まなぶん」編集長の船木理依さん（前・北海道新聞ＮＩＥ推進センター委員）を講師に迎え、高校新聞局（部）の顧問教諭が研修する「第11回新聞指導研究協議会」（道高校文化連盟新聞専門部主催）が1月7日、札幌市中央区の道民活動センター（かでる2・7）で開かれた。

札幌のほか旭川、苫小牧、帯広、函館などから約20人が参加した。研修のテーマは「よりよい新聞をどう作るか～取材・編集・指導のノウハウ～」。

はじめにインタビュー記事を載せた実際の高校新聞を全員に配布し、記事の構成や見出し、写真の使い方、レイアウトなどについて長所や改善すべき点を分析してもらった。

船木さんは「笑顔や暗い表情など写真の持つ情報量は多い。できるだけ大きく載せることで読む人がひきつけられる」「長文記事はテーマごとに小見出しを付ける」「インタビューの意図を知らせるため必ずリードを書く」といったポイントを次々に指摘した。

その上で、「あらかじめ局員全員で綿密な打ち合わせをし、編集方針を固めることが大切」「テープを起こした内容をそのまま載せてはつまらない。どこが要点で、どこを削除すべきなのか。人の手をかけることで記事がいっそう読みやすくなる」とアドバイスしていた。

記事執筆やレイアウトの基本などを熱心に説明する船木編集長

戦争報道通し平和訴え

読売・吉形編集部長が講演

道ＮＩＥ研

道ＮＩＥ研究会の冬季研修会では、読売新聞道支社の吉形祐司編集部長＝写真＝が「紛争取材の現場」と題して講演した。

吉形部長はフセイン政権崩壊後の２００３年、イラクのバグダッドに入って取材した。米軍が戦車や攻撃ヘリコプターを投入、事実上の戦争状態に逆戻りしていた時期だったという。

まず衛星電話や防弾チョッキ、発電機など紛争取材で用意すべき装備について触れ、「取材基地をつくることが最初の仕事になる。世界中からジャーナリストが集まってくるため、手頃な安宿や民間アパートは奪い合いになる」と話した。

一方で、あきらめから感情を失った避難民の表情など「現場でしか分からない情報もある」とした上で、「文字や映像では到底伝えきれない『死臭』も初めて体験した」と振り返った。

また、若い米兵に「１分間だけ」という約束で衛星電話を貸したエピソードを紹介。「甘えて母親と話す彼を見た時、戦争は年寄りが起こし若者が犠牲になると痛感した。記者は戦争報道を通じ平和を訴えなければならない」とまとめた。

ＮＩＥ実践奮闘記

釧路市立芦野小教諭
ＮＩＥアドバイザー　渥美　清孝

音読が主体性を育む

心に残る1枚のはがきがあります。中学校の入学式、少しはにかんだ笑顔の男の子の写真が印刷されたはがきです。

彼は、卒業と同時に札幌に引っ越した私の教え子です。彼を担任していた時、勤務校はＮＩＥ実践指定校で、私が真剣にＮＩＥに取り組み始めた時期でした。

5年生初めの学級懇談会の後、教室に残ってくれた彼の母親が私に尋ねました。「先生うちの子、大丈夫でしょうか」

一瞬質問の意味が分かりませんでした。彼は、非常に真面目で心優しい男の子でした。私の目から見て特に大きな問題を抱えているようには見えていなかったのです。

しかし、話を聞いてみると思い当たる節もありました。確かに彼はおとなしく、あまり口数の多い方ではありませんでした。母親はそういう彼の様子について、自主性に乏しく覇気がないという評価をし、心配していたのです。

母親は、彼に自分の思いをもっとはっきりと表現できるようになってほしいという願いをもっていたのです。彼の主体性の成長を願っていたのです。

真面目さという彼の良さを伝えた後、母親にアドバイスをしました。「音読は有効ですよ。自分の思いをはっきりと表現するための素地として、音読の力を高めるのが必要ですから」

なるほどとうなずいた後、続けて母親は尋ねました。「何を読ませたらよいでしょう」

私は答えました。「新聞がお薦めです。毎日２～５分程度で十分です。音読をすると目と口と耳とを使って学ぶので、学習の良いウオーミングアップになります。かのリンカーンも新聞の音読をしていたらしいですよ」

母親は彼に音読を課しました。さらに、自分が読んだ記事をスクラップしてコメントを書くという自学をするようになりました。彼のこのような学習はきっと彼の主体性を育てたのでしょう。その自学は約1年間も続いたのです。

そして、引っ越し後の慌ただしさの中、わざわざ私にはがきを送ってきたのです。「先生、僕は元気でやっています。新しい中学校も楽しいです」

はがきに書かれたメッセージを読むと、彼の健やかな成長と新聞の教材としての価値を思い出さずにはいられないのです。

名寄など3地区でNIEセミナー

当協議会が主催する地区セミナーが12月9日に室蘭市、同22日に名寄市、1月30日に胆振管内安平町の計3カ所でそれぞれ開かれた。

小学新聞で文章構成理解 安平

安平町立早来小が会場の第9回安平・日胆セミナーでは、同校の冨樫忠浩教諭が「道新小学生新聞　週刊フムフム」を活用して随筆の基本を教える授業を公開した＝写真＝。

国語科の単元「自分を見つめ直して」の一環で、冨樫教諭は漫画家やなせたかしさん（故人）の特集記事「夢と勇気のメッセージ」を、担任する6年生21人に読ませ、この記事を参考にしながら随筆の「骨組み」を考えさせた。

授業では「出典」「引用」を明記させた後、「比較」「疑問」やそれに対する児童なりの「解」、さらに自らの「夢」、それを実現するための「努力・決意」を箇条書きにさせ、文章表現における構成の重要性と、「出典」などの学習用語を同時に理解させた。

夢に向け努力 道徳で活用 室蘭

第10回室蘭・胆振セミナーの会場は室蘭市立地球岬小。約30人の参加者が見守る中、同校の三上友樹教諭と日下部憲一コーディネーターが6年生の道徳で、授業を公開した。

使ったのは東日本大震災後、宮城県気仙沼市の仮設住宅で暮らす女性が被災を乗り越え、定時制高校を卒業した話題を取り上げた北海道新聞の記事。

子供たちは「津波で妹夫婦を亡くしたのに、あきらめず努力して夢を実現したのはすごい。ぼくも夢に向かってがんばりたい」などと感想を述べた。

山下亘・登別市立登別小教諭ら3人が「言語力高める授業工夫」などをテーマに実践報告した。

記事内容を説明する日下部コーディネーター（右奥）

セミナーでは高柳茉夕・苫小牧市立勇払小教諭らの実践報告も行われた。

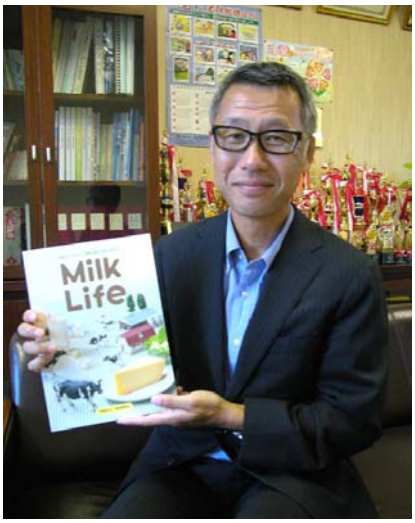
野上教頭（帯西陵中）ら編集

中学生向け教材に反響

中央酪農会議発刊

日本新聞協会のNIEアドバイザー、野上泰宏・帯広市立西陵中教頭が編集責任者を務めた中学生用の教材「Milk Life（ミルク・ライフ）」が反響を呼んでいる。

道徳や総合学習の授業での活用を想定しており、人を束ねて1昨年7月にスタート。発達段階に合わせて1年は「いのち」、2年は「社会」、3年では「未来」のテーマをそれぞれ決め、1冊（A4判・44ページ）で酪農全般の基本が押さえられるように仕上げた。



中学生用教材「Milk Life」を手にする野上教頭

野上教頭は、芽室中（十勝管内）勤務だった13年前、総合学習の「酪農コース」担当になったことで、その魅力に触れた。生徒30人を引率して近隣牧場を訪問した際、「受け入れ先の生産者が牛のあれこれを熱心に説明してくれ、乳搾りも体験した。朝8時に出発し、学校に戻ったのが夜7時。生徒より私が牛のとりこになった」という。

十勝は約1500戸が21万頭余りの乳用牛を飼育。乳業や菓子、農業機械などのメーカーのほか帯畜大も立地、居ながらにして酪農のすべてが学べる土地柄だ。「何より働き者で賢明な酪農家が多い。教材には彼らの強い思い入れも反映させました」と笑顔で話した。

「牛の力を存分に借りて命や食、勤労の大切さを伝えたつもりです」と振り返った。

酪農家の全国組織・中央酪農会議が発行した。

編集作業は、野上教頭が本州の教員と生産者計3人がこの「骨組み」をもとにして、口答で随筆を披露し、約50人の参観者から温かい拍手が送られた。

締めくくりとして児童3人がこの「骨組み」をもとに

アドバイザーが出張指導 名寄

名寄市の風連中央小で開かれた第1回名寄・上川セミナーでは、日本新聞協会のアドバイザー渥美清孝さん（釧路市立芦野小教諭）＝写真＝が同校5年生20人を相手に、「暮らしを支える情報」をテーマにした公開授業に臨んだ。

不登校だった中学1年生の女子が、父親と自転車で490キロを走破して不登校を乗り越える話を紹介した、北海道新聞の記事を活用した。授業では宗谷岬でハイタッチしている写真から親子の会話を想像させ、最後に見出しを付けさせた。児童からは「ゴールからの自信」など、内容を的確に捉える見事な見出しが発表された。

また福川岳樹・名寄市立豊西小教諭、戎谷義明・士別中教諭、滝沢英樹・名寄高教諭の3人が実践発表を行った。

新聞ってステキ！

宮尾　篤さん　4

「事実」に迫る姿勢同じ

元NHKソウル支局長

メディアの違いはあれ、放送記者も新聞記者もファクト（事実）に迫る姿勢で共通しています。そのためにあらゆる方法を駆使し、努力するのがわれわれの仕事なんですね。

時に「歴史の目撃者」となることができ、言い換えると記者冥利に尽きる体験をすることがあります。

ソウル支局長2年目だった1994年7月9日正午、韓国KBSが、北朝鮮の放送を傍受し、金日成（キム・イルソン）主席死去を伝えました。静穏だった支局内は一転してハチの巣をつついたような騒ぎに。とっさに受話器を握り東京のNHK放送センターへ一報を吹き込みました。これは、臨時ニュースとして日本全国に流れます。

「北朝鮮の体制は崩壊するのでは？」「韓国の打つ手は？」「38度線はさんで何が起きる？」「日本はどう対応する？」―。何より「その取材態勢をどう組む？」。走馬灯のように、さまざまなことが脳裏を駆け巡ったものです。

それから約1カ月間。臆測が乱れ飛び、何が起きるか分からないスリリングな展開が続きます。支局スタッフはもちろん、東京からの応援部隊を指揮しながら、僕自身も出来うる限り確度の高い「情報源」に接触し、朝鮮半島の激しい動きを日本に向かって伝えたつもりです。

同時に歴史の最前線に身を置いている幸せを感じたものです。

◆・◆・◆

高校生の時にジャーナリスト立花隆氏が、総理の豊富な資金集めの実態を解明した「田中角栄研究」を月刊誌で発表し、その後、一国のトップが退陣に追い込まれます。事実を報道することで権力を使った社会的犯罪が告発できる。漠然とですが、それが記者を目指すきっかけでした。

振り返ると、冷や汗の出るような失敗談が少なくありません。大韓航空機撃墜事件（83年）では、北海道の紋別の海岸に漂着した遺体についてリポートをしました。僕は「肉の塊が…」「毛穴が…」と遺体の細部を伝え、放送直後にデスクからお目玉を食らいます。「『遺体の一部』という表現で十分だ。遺体がどうやって流れ着いたのか、現地の反応はどうなのか、そのあたりを厚めに伝えろ」ってね。

当時の中曽根康弘首相が断行し、衆参ダブル選挙となる「死んだふり解散」（86年）の時は「総理番」でした。ダブルになるか否かは、政局を左右する大きなターニング・ポイントでした。中曽根氏は断行直前、「解散はない」とする心境を「白さも白し富士の白雪」と表現します。自分の心境は富士山の白い雪のように真っ白で、嘘はないというわけです。結果的にまんまとだまされてしまいました（笑）。

◆・◆・◆

NHKの記者は一つのニュースに対し、2種類の原稿を書きます。情景などのディテール（細部）を加味したラジオ用と、映像が補ってくれる部分を刈り込んだテレビ向けです。それと、放送は「速報性」が大きな特長です。ニュースは24時間体制で伝え、「一報」を送った後も、新しい情報を逐次盛り込み、その都度ニュースを差し替えていきます。これが締め切り時間に向けて仕事をする新聞との決定的な違いですね。

半面、新聞は活字ですから、放送には及ばない「記録性」という優れた点があります。例えば重要裁判の判決文、政府の審議会がまとめた報告書のような資料や文書をかなりな程度、掲載・報道できます。また、「今」の事象を伝え続けているということは、歴史を積み上げていることにつながり、容易に過去へさかのぼれ、未来を予測するための貴重なデータにもなり得ます。

新聞は幅広い分野をカバーしていることを含め、使いようによっては教育的効果は大きいと思っています。（構成・葛西信雄）

<略歴>みやお・あつし　1958年6月、東京都生まれ。NHK入局は81年4月で、初任地は北見放送局。85年に報道局（東京）政治部に異動し「総理番」や野党、外務省などを担当。90年に国際部に転じ93年から4年間、ソウル支局長として活躍した。2012年からは、一般財団法人NHKインターナショナル国際事業部長。一橋大卒。

編集後記

○…新聞販売店に2年間、住み込みで働いた経験があり、柳谷直明さんの今号1面コラムを感慨をもって読ませてもらった。暴風雪も珍しくない今時分の配達は大人でも大変な仕事だ。ましてや小学生だった柳谷さん。その苦労に思いをはせるとともに、あらためて新聞というメディアは「人」によって支えられている―と、痛感した。

○…取材・執筆担当の記者を源流に、さまざまな工程を経ながら新聞は商品になる。朝刊と夕刊、さらにそれぞれの早版と遅版。大まかに4種類の締め切り時間をめがけ、各分野のマンパワーが集約的に動員される。締めくくりは「柳谷少年」ら配達する方々で、彼ら彼女らの力を借り、読者の元へと届けられる。

○…4面では、宮尾篤さんが新聞の「記録性」に言及している。この特長は教材としての有用性と表裏をなすもので、事実「私の商売道具です」と打ち明けた熱心な実践教諭もいる。振り返るまでもなく、北海道のNIE活動もこうした「人」が支えており、そのことにしみじみと感謝する次第である。（葛）